上で貴重な資料となるであろう。

第２号木簡も，単なる経名の羅列ではなく，冒頭の「四天王□」は四天王寺または四天王法を意味するとみるならば，律令国家が辺要国において，鎮護等を目的として，四天王寺の設置及び四天王法会の励行を指示しているだけに，律令行政上の一施策としての意義を有するとみることができる。したがって，この木簡からは，固有の寺院を想定するよりは，国・郡衙のような律令行政機関の中での四天王法会の実施などを想定する方が妥当のようである。

このように，わずか５点ながら木簡の内容は地方行政機関，具体的には郡衙レベルで考えられるものと一応判断される。しかし，この点の断定は発掘調査の進展とともに木簡をはじめとする資料の増加をまって，行なわれるべきであろう。

（注）この点で，払田柵跡第７次発掘調査で発見された木簡と共通する面があり，今後，この種の木簡の増加により，律令地方文書行政の実態の解明が期待されよう。

表　嘉祥二年正月十日下稲日紀　□〔充ヵ〕年料

裏　□〔合ヵ〕三千八百卅四□〔束ヵ〕「□〔勘ヵ〕了正月十□〔二ヵ〕」（別筆）

詳しくは拙稿「払田柵跡出土の新木簡について」（「日本歴史」第357号　1978年２月）を参照してほしい。

道伝遺跡出土の竪杵について

（財）元興寺文化財研究所　北野信彦

Ⅰ．はじめに

昭和58年８月、米沢市六郷にある㈶農村文化研究所において置賜地方の民具の調査を行なった際、川西町道伝遺跡において多量の木製品が出土していることを知った。その後藤田宥宣氏をはじめ同町教育委員会の御好意により、道伝遺跡出土の木製品を調査する機会を得た。その内、竪杵についてここで若干の報告を行なわせていただく。

Ⅱ．道伝遺跡出土の竪杵

道伝遺跡からは、多量の木製品が出土している。内容的には、鍬・田下駄・杵などの農具、曲物・盆・木椀などの生活用具、斎串・絵馬などの祭事用具、弓などの武器、その他木簡など多枝におよんでいる。そしてそれぞれ民具学、考古学的資料としては、大変貴重な遺物である。

さて、道伝遺跡からは現在竪杵が一点出土している。川西町教育委員会の報告では、「きね(27)　Ⅴ層上・竪杵・長さ90.5cm、太さ直径5.1cm、中央を持ちやすいように細く削り、直径３cmを測る。両端は使用痕が認められ、全面擦れたような磨滅痕がみられる。」と記されている。

北野は竪杵の観察を行なう際、(1)使用時期　(2)木取り方法　(3)樹種選択　(4)全体および搗き部先端の形状　(5)長さ×径の太さ　(6)使用方法、などの項目にわけて調査している。この方法に従って、再度道伝遺跡の竪杵の観察を行なってみた。

その結果、道伝遺跡の竪杵はクヌギ材を用いており、木取り方法としては木芯をはずした辺材を利用していた。しかし川西町の報告にもあるように、全面擦れたような磨滅痕がみられ、顕著な加工痕は認められなかった。また全長は90.5cm、搗き部先端の直径は4.0cm～5.1cm、中央の握り部直径は約３cmであり、全体的に細身の作りである。さらに全体の形状では、握り部が片手で持ちやすいように細く削ってあり、握り部が全長にしめる割合が極端に少なく簡素な作りである。搗き部先端の両端とも平らに加工してあり、それぞれ使用痕が認められた。（図１、写真１、２、３、４）

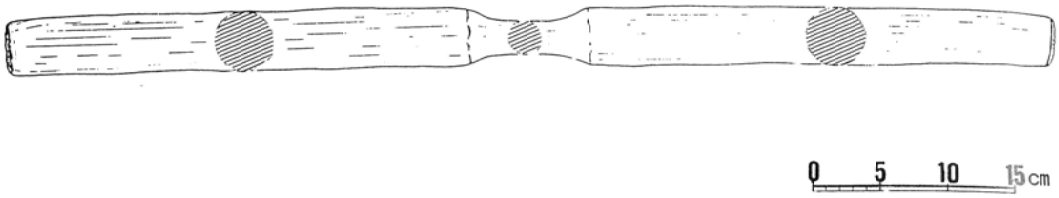
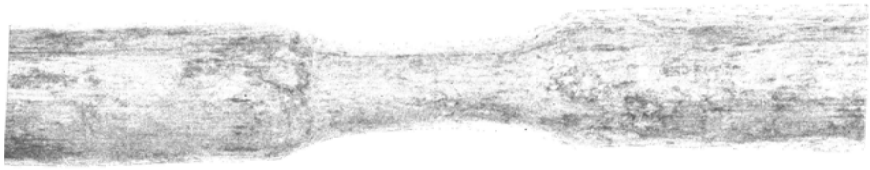


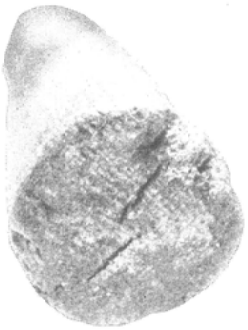
図1　道伝遺跡出土竪杵実測図

1　道伝遺跡出土竪杵（RW27）

2　搗き部先端面の形状



3　握り部の形状



4　木取り方法の形状

Ⅲ．若干の考察

道伝遺跡の竪杵の観察結果をふまえて、若干の考察を行なっていきたい。

まず、東北地方で今日までに報告されている考古例としての竪杵は、岩手県落合Ⅱ遺跡（平安時代）、同下谷地B遺跡（平安時代）、山形県嶋遺跡（古墳時代）、同道伝遺跡（奈良時代後期～平安時代初期）、宮城県青木脇遺跡（平安時代）の三県下五遺跡による。すなわち古墳時代ー平安時代の資料が中心となっている。（表１）

竪杵は、稲作農耕技術とともに大陸から日本に伝播された農具の一つとされている。その出現も、弥生時代前期以前には九州地方北部で、弥生時代前期には近畿・東海地方西部まで、弥生時代中期には東海地方東部まで、弥生時代後期には関東地方まで、そして古墳時代には東北地方南部までと、国内における弥生文化の伝播ルートと類似している。しかし西日本に比べて東日本における竪杵の出現、派生が、土器様式のそれより若干おくれる傾向が認められる。その意味では、道伝遺跡の竪杵の使用時期が奈良時代後期～平安時代初期であることは、前記の結果と大差、矛盾は認められない。

次に、道伝遺跡の竪杵の作製方法に関してみてみる。一般に木製品における樹種選択は、①遺跡周辺の植生条件を無条件に受け入れている場合、②木製品の機能、用途にあわせて樹種選択を行なっている場合、の２つがある。竪杵の場合、多くの結果より、重量のある堅木の広葉樹を選択的に用いたことが多いようである。また竪杵の木取り方法でも、①芯モチ材を用いる場合、②木芯をはずした材を用いる場合、の２つがある。（注１）

そして、考古例の竪杵の木取り方法を調べてみると、木芯をはずした材利用の竪杵の方が芯モチ材利用の竪杵より若干先行して出現する傾向が各地で認められ、大変興味深いことである。

道伝遺跡の竪杵は、クヌギ材でかつ木芯をはずした材利用がなされていた。また、この竪杵の特徴の一つに全体的に細身であることが上げられる。これらの点を考慮に入れると、あまり太くないクヌギ材を使用しながらも、木芯をはずした材利用を行なったため、竪杵が必然的に細身の作りになったとも考えられる。しかし、これはあくまでも想像の域は脱しない。ただ全国的にみて、木芯をはずした材利用の竪杵の使用時期の下限をみると道伝遺跡の竪杵は最も新らしい部類に属するようである。

なお道伝遺跡の竪杵の表面は、全面擦れたような磨滅痕がみられ顕著な加工痕は認められない。しかし今日の民具例や、一部の考古例をみるまでもなく、金属製工具で表面の面取り加工を行なったことは十分に考えられることである。

No	県名	遺跡名	時代	樹種	木取り方法	全長×径の太さ(cm)	全体および搗き部先端の形状	文献
1	岩手	下谷地B	平安	コナラ(2)	芯モチ材(2)	110×7.0　110×7.4		5
2	岩手	落合Ⅱ	平安	アサダ(1)	芯モチ材(1)	172.0×10.0		4
3	山形	嶋	古墳	スギ(4)	(木芯をはずした)柾(4)	91.5×9.6 75.6×11.7 82.0×10.0 61.0×11.2		3
4	山形	道伝	奈良(後)～平安(前)	クヌギ(1)	(木芯をはずした)柾(1)	90.5×5.1		1，2
5	宮城	青木脇	平安					13

表－1　東北地方における考古例としての竪杵

次に、道伝遺跡の竪杵の形状に関してみてみる。前記したように、全体の形状としては握り部が片手で持ちやすいように細く削ってあり、握り部の全長にしめる割合が他の考古例や民具例、文献例の竪杵に比較してみて、極端に少なく簡素な作りとなっている。また道伝遺跡の竪杵の径の太さを、全国例と比較してみると、最も小さい部類に属している。このような点を考慮に入れてみると、道伝遺跡の竪杵はその形状においてもかなり特徴的な竪杵であると考えられる。

最後に、道伝遺跡の竪杵の用途、機能、使用方法に関してみてみる。考古例の竪杵の場合、民具例の場合と異なり使用方法などの考察はかなり困難なことである。しかし民具例などの実例を参考にしたり、搗き部先端や全体の形状を観察することによりある程度復元可能である。全体の形状や全長の観察などにより、日本に竪杵が伝播されて民具例にいたるまで、長型の竪杵と短型の竪杵の二種類が機能、用途に応じて存在していたことが知られている。道伝遺跡の竪杵の場合、その内の短型の竪杵と考えられる。すなわち片手で竪杵の握り部を持ち、もう一方の手で臼の端か竪杵の上端を持って作業を行なったことが想像される。また、搗き部先端の形状が両端とも平らに加工してあり、それぞれ使用痕が認められる点(注2)、竪杵自体細身でかなり軽量である点などから、時に応じて両端を交互に使いながら穀物類の脱穀調整に使用されたのではないかと考えられる。(注3)

Ⅳ．まとめ

以上の点を総合してみると、道伝遺跡の竪杵は木取り方法、樹種選択、全体および搗き部先端の形状、全長および径の太さなど穀物の脱穀調整に適するように注意深く作製された農具であったと言えよう。またその内でも木取り方法、全体の形状、竪杵の径の太さなどが、他の考古例としての竪杵と比較して特徴的であることが、今回の調査で考察された。

Ⅴ．謝辞

資料の調査を許可下さった藤田宥宣氏をはじめ、川西町教育委員会の諸氏に謝意を表します。また本稿をまとめるにあたって、愛知大学、佐野賢治助教授、㈶四国民家博物館、桂真幸研究員、㈶元興寺文化財研究所　保存科学研究室、増澤文武室長、同、松田隆嗣主

任研究員ほか、多くの方々のおせわになりました。あわせて謝意を表します。

（付記）なお、本稿を作成するにあたり、愛知大学同友会の昭和58年度学術研究助成金の一部を使用した。

Ⅵ．参考文献

1．川西町教育委員会「川西町史上巻」1979
2．川西町教育委員会「川西町埋蔵文化財調査報告書第２集」1980
3．山形市史編纂委員会他「山形市史　別巻Ⅰ　嶋遺跡」1968
4．岩手県教育委員会他「落合Ⅱ遺跡」1981
5．岩手県教育委員会他「東北縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告書（北上地区）XⅡ」1982
6．宮城県教育委員会「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報」
7．佐々木長生「会津農書の農具をめぐって（一）、民具マンスリー16巻５号1983
8．三輪茂雄　「臼」・ものと人間の文化史25　法政大学出版局　1978
9．瀬川芳則「稲作農耕の社会と民俗」稲と鉄、日本民俗文化大系３　小学館　1983
10．松田隆嗣　「遺跡より発掘された木製品の樹種について―弥生時代を中心にして―」古文化財の科学　26号
11．嶋倉己三郎「木質出土物と古代人の生活」元興寺文化財研究所年報　1977・1978
12．元興寺文化財研究所「出土木製遺物の実態調査報告書Ⅰ」1978．3
13．北野信彦「民具例としての竪杵についての一試論」農村文化論集第四集　1984
14．北野信彦「竪杵の出現と派生についての一試論」元興寺文化財研究17・18号　1984

（注１）山形県嶋遺跡など、今日までにごく数例ほどスギ材やマツ材などの針葉樹を用いた竪杵の報告がある。しかしこれは、例外的に遺跡周辺の植生の影響を強く受けたためとも考えられる。

（注２）近世の文献例の内、会津農書などに竪杵には打杵と手杵の２種類が記されている。また、福富草子、春日権現霊験記絵巻、直幹申文などの中世の絵巻物にもそれぞれの竪杵の使用例が記されており、考古例のそれの参考ともなろう。

（注３）沖縄の民具例などで、あまり重量があり搗き部先端の径が太い竪杵では、穀物の脱穀を行なう際に穀物自体を割ってしまう欠点があることが指摘されている。